今日は 9 月 4 日、インドネシアから帰国した次の日です。今回の Gruou Exchange では数々の素晴らしい出会い、今までに味わったことのない体験、未知の知見との遭遇など、文章では表せないような素晴らしい１週間を過ごすことができました。今述べたよう、その経験を正確に文章で表現することは難しく、この感想もどこから手を付ければいいのやら分からない状態です。あのバリの透き通るような海や、動物たちの活き活きとした表情、獣医師たちの真剣な眼差しはその場にしか存在しないものです。そんな中あえてこの文章を書くのは、僕がそこで何を感じたか、どんな気づきを得られたか、そしてこの先どうするかを残しおくためです。具体的に言えば、僕はインドネシアで2つの大きな気づきに出会うことができました。ひとつは「日本の遅れ」、もうひとつは「日本の可能性」です。

「日本の遅れ」というのは主に意識的なものです。技術的にも、経済的にも日本がまだまだ世界の上位にいることは間違いありません。しかし、グローバル化する社会の中で、その波に乗ろうとする気概はインドネシアの友人たちの方が格段に高く感じました。その最たるものは「英語」と「積極性」です。彼らにとっても英語は第二言語なので、格段に流暢という訳ではないのですが、間違いを臆することなく話しかけてきます。そして明らかに参加した日本人の大半よりも英語を扱えます。インドネシアの獣医系大学のほとんど講義を英語で行っていますが、それだけでなく、各人も日頃より意識的に英語を学んでいると語っていました。あるものは国際機関への夢を語り、あるものはオーストラリアへ留学しインドネシアの酪農業を発展させることを語ります。彼らは英語が使えることは当然であると考えているし、その努力もしていることが伺えました。そして積極的に IVSA の国際的な集まりに出席し、人脈を広げています。この意識の遅れが積み重なって、いつか日本は今の場所へおいてけぼりをくらうのではないかという危機感が頭をかすめました。

一方インドネシアに行くことで新たな「日本の可能性」も見えてきました。公衆衛生分野、感染症分野などはやはり日本が他国にひけをとらない優れた分野であるし、前述した技術・経済的な面は日本が誇れるものであることを実感しました。（見学させていただいた農家の研修施設のようなところでは、牛やヤギなどの家畜が飼われているにもかかわらず靴の洗浄などの防除処理がなされていませんでした）。一方インドネシアの日本より優れている部分を見ることで、日本の体制を反省するきっかけも得られました。具体的には、バリで見学した動物保護施設は全て寄付金によって運営が行われており、殺処分数もゼロでした。政府管轄で毎年多くの犬猫を処分している日本が見習うべき部分は多いと感じました。このように海外に出かけ、日本を外から客観視し、その行く先々に国々と比較することで、日本の伸ばすべき長所、そして改善すべき短所がありありと見えてきます。それはつまり日本の伸びしろ、新たな可能性に繋がります。

これら2つの気づきから僕は、日本の獣医学生を学生のうちに海外へ派遣し、それによって意識的な遅れを取り戻し、新たな日本の可能性に気づかせることが、今後必要であると実感しました。そのためにもこの経験を踏まえ、獣医学生が海外に行きたくなるような企画、実際に働くこと・留学することに興味のある学生が情報を手に入れ、人脈を広げられるような企

画を僕自身で作っていきたい衝動に今かられています。そのためにもこれを期にこのプログラムを主催した IVSA-J に加入し、この衝動を実現させていく予定です。

最後になりますが、多くの時間・労力を割いてこの素晴らしいプログラムを遂行してくれた IVSA-J、IVSA-Indonesia の皆様に感謝を表したいと思います。ありがとうございました。